

廬山ろざんに登る

丸川知雄

廬山ろざん。それは中国現代史のなかで忘れることのできない地名である。一九五九年七月から八月にかけて、中国共産党の重要な会議が開かれ、彭徳懐国防相が毛沢東に「大躍進」の行き過ぎを戒めたところ、逆に「反党集団」とののしられて職務を解任された場所である。もともと毛沢東自身も「大躍進」の急進性を軌道修正するつもりでこの会議を招集したのだが、逆に急進路線を再確認する結果となってしまった。もし毛沢東が彭徳懐の諫言を素直に受け入れていれば四〇〇〇万人とも言わ

れる「大躍進」による餓死者はもっと少なくて済んだであろう。

もっとも、江西省に属する廬山という場所なぜ共産党の重要会議が開かれたのか、私にはいささか解せなかった。なにしろ江西省は南方の内陸にある経済的に遅れた地域で、そんな僻遠の山地までわざわざ出かけていく理由がよくわからなかった。だが、実際に行ってみてその疑問は水解した。廬山は上海や南京など長江流域に住む欧米人たちにとって最も便利な避暑地として一九世紀末から開発された、いわば

中国の軽井沢なのである。

その「便利さ」は鉄道と道路が整備された現在の地図をみてもよくわからない。中国に鉄道がまだほとんどなかった一九世紀末の地図を思い浮かべなければならぬ。長江流域は気温三〇〜四〇度で多湿の夏が何ヶ月も続き、欧米人には耐え難いものであった。廬山は上海から長江を船で遡上して九江まで行き、そこからは四〇キロメートル足らずの距離にある。このような「至便」の場所でありながら海拔一四〇〇メートルの高地なので涼しい。但

看取りの文化と ケアの社会学

大出春江編著 定価3465円
現代社会における死と、死にゆく
ことを看取る現場を考察する。

言葉と文体

修辞法の試み

佐藤信衛著 定価1890円
学問、翻訳、あるいは一般的な
言語表現についてあるべき姿を
体系的に論じた、言語論、文章論。

解釈型歴史学習 のすすめ

対話を重視した社会科歴史
土屋武志著 定価2100円
歴史を解釈する民主的で、対話
型の歴史学習とは何かを考える。

平和構築の思想

グローバリ化の途上で考える
マティアス・スルツ・パッハマン編著
舟場保之・御子柴善之 監訳
9.11テロ直後におこなわれた学
横断的討議。永遠平和、国際公
法、安全保障理事会、寛容……
定価2730円

科学技術の倫理学

勢力高雅編著 定価2100円
「責任」という概念から技術者
倫理を考えるうえで必要不可
欠なビジョンを描く。

新基礎から学ぶ 統計学

大澤秀雄著 定価2625円
具体的な事例を通じて、統計手
法や概念を繰り返し、わかりや
すく解説する。

新 社会科教育 の世界

歴史・理論・実践

森茂岳雄・大友秀明・桐谷正信編著
中学校の社会科教師になるた
めの知識・技能を解説する。
定価2205円

梓 出版社

〒270-0034 千葉県松戸市新松戸7-65
TEL/FAX 047-344-8118
http://www.azusa-syuppan.co.jp

から一〇年経ち、国づくりも着々と成
果を挙げている（と思っていた）ので、
そろそろ自分たちに褒美を出してもよ
い頃だと思ったのだろう。毛沢東が泊
まったのは、かつて宋美齡が所有し、
蒋介石も住んでいた「美廬」という名
の別荘だった。毛沢東は廬山に来るや、
名所旧跡を回り、毎日ダム湖で泳ぎ、
夜は教会でダンスに興じた。その教会
は、宋美齡との結婚を機にキリスト教
に入信した蒋介石が祈りを捧げた場所
だ。無謀な「大躍進」によって国中が
苦しんでいることはまるで眼中になか

った。他の指導者たちもバカンス気分
で廬山に赴いた様子が当時の映像から
読みとれる。そうしたなか、現状を深
く憂慮して会議に臨んだのが国防相の
彭徳懐だった。彭徳懐は経済政策の担
当ではなかったが、故郷の湖南省の農
村を視察した際に生産量の増し報告
が行われている現状を知り、「大躍進」
と人民公社が大成功を収めているとい
う公式発表とは裏腹に大変な惨禍をも
たらしているのではないかと思ってい
た。会議が始まるや彭徳懐は「大躍進」
を批判する発言をしはじめた。ついに

は「大躍進」を鋭く批判する意見書
をしたため毛沢東に送った。
「大躍進」が大失敗であるというこ
とは他の指導者たちもおおむね感じ
ていたに違いないが、「大躍進」の成功
を確信して得意の絶頂にいる毛沢東に
向かってそれを言うのは、あたかも
「王様ははだかだ」と叫ぶのと同じぐ
らいに勇気がいること、現代日本の若
者用語を使えば「KYな」発言であっ
た。
バカンス気分をぶち壊しにした彭徳
懐に対して毛沢東が怒り心頭に達した



廬山會議が開かれた会場



廬山にある別荘の一つ

し、長江流域の湿気を帯びた空気が高
い山に引っかかって冷やされるため、
平地で晴れている時でも廬山の上の方
は曇ったり、雨が降っていることが多
く、霧も多い。

この場所に目をつけ、一八八六年に
別荘地の開発を始めたのが当時二二歳
だったイギリス人宣教師リトルであっ
た。地元の人々に贈賄して牯牛嶺（グ
ーニウリン）と呼ばれる山上の比較的

平らな地域を二束三文で手に入れると、
これを二五アールズ以下の区画に分け、
建蔽率一五パーセント以下というルー
ルを定めて別荘地として売り出した。
本来の地名に少しばかり手を加えて牯
嶺（Coolin）と、いかにも涼しそう
な名を付けて売り出したところ欧米人
たちの人気を集め、一九二七年には五
六〇棟もの別荘が並ぶ地域となったの
である。

事実上の外国人租界になっていた廬
山の中国化を推し進めたのが一九二八
年に北伐に成功して南京に国民政府を
開いた蒋介石であった。蒋介石は南京
から水陸両用飛行機に乗ってたびたび
廬山の別荘を訪れ、廬山はまるで「夏
の首都」のようなものになった。一九
三〇年代には国民軍幹部の訓練基地が
築かれ、平和な避暑地は共産党との内
戦や日中戦争の渦に巻き込まれ、日本
軍の空襲まで受けた。

蒋介石と国民党が台湾に去って静か
になった廬山が再び中国政治の生臭い
舞台となったのが、一九五九年の「廬
山會議」だった。それまで中国共産党
の最高幹部たちは夏になると北京から
さほど遠くない河北省の北戴河で避暑
するのが通例で、そこで共産党の重要
會議が開かれることもあったが、遠く
離れた廬山で避暑を兼ねた中央政治局
拡大會議を開くことにしたのは、建國

ことは言うまでもない。私信として書かれたこの手紙を毛沢東が会議参加者の参考に供すると言って配布したところから、リラックスした雰囲気であった。盧山会議は政治闘争の場へ一変した。外交部副部長の張聞天ら何人かが彭徳懐の考えを支持する意見を述べたが、毛沢東が「大躍進」と人民公社の方針を動揺させてはならないと述べたことで、彭徳懐とその支持者たちは孤立した。八月に入ると盧山に政治局員以外の中央委員も召集されて中央委員総会が開かれ、「彭徳懐を首謀者とする反党集団に関する決議」が採択されて、政治闘争の勝敗が決した。盧山会議以降、毛沢東の暴走に真っ向から反対する勇気を持った指導者はいなくなり、中国は文化大革命の悲劇へ向かって突き進んでいく。

一九六一年夏には二回目の「盧山会議」が開かれ、そこでは「大躍進」破

綻後の調整政策が話し合われた。三回目の「盧山会議」は一九七〇年八月の中央委員総会である。これは、毛沢東の後継者に指名されていた林彪による「ほめ殺し作戦」が展開されたことで知られる会議である。林彪は自らの後継者としての地位が不安定であることにがまんできず、毛沢東を国家主席に祭り上げようと画策したり、毛沢東は天才であるとの論を展開したりした。毛沢東は、林彪が世代交代の時期を早めようと策動しているのではと怪しみ、林彪と一緒に毛沢東を国家主席に推戴する論を張っていた陳伯達を会期中に失脚させた。林彪の心配は結果的には的中し、会議から一年後に林彪は夫人や息子とともにソ連へ逃げる途中に飛行機が墜落して死亡した（とされている）。

三回目の盧山会議の映像や写真を見ると、一九五九年の一回目の盧山会議

のリラックスした雰囲気とは打ってかわって、参加者たちの異様な服装と不安そうな表情が印象的である。参加者たちは概して五〇歳以上の高齢だが、紅衛兵が着る下層兵士のようないでたちをしており、その年齢、地位、そして高原の避暑地である盧山という背景にまるでそぐわない。カラー写真で見ると、毛沢東夫人の江青の着ている人民服も、着古したように生地が色あせているのがわかる。

文化大革命による経済の逼迫によって共産党の幹部たちでさえみすばらしい格好をせざるを得なくなった、ということではないだろう。おそらくこれは貧農・下層労働者の姿を装うためのいわばコスプレなのだ。会議が終わってそれぞれの宿泊先である豪華な別荘に戻ったらすり切れた人民服を脱ぎ捨てて、もっときれいな服に着替えていたに違いない。

かつて裕福な欧米人たちの別荘地だった盧山、蒋介石が夏の首都を置いた盧山、共産党の最高幹部だけが立ち入ることのできるリゾート兼コンベンション・センターだった盧山は、今や国内の観光客が押し寄せる観光地になった。三回目の盧山会議が開かれた盧山人民劇院は、一九七〇年の中央委員会の様子が再現されて公開されている。会議場の後方には「偉大なるマルクス



第3回盧山会議が開かれた大会議場

主義、レーニン主義、毛沢東思想万歳」の横断幕が掲げられ、テーブルには委員の名札が置かれている。最前列には江青の名札もあった。「美廬」をはじめ往時に権力者や富豪が住んでいた別荘も今は観光名所として開放されている。格差拡大が問題視される中国だが、こうして盧山を大勢の庶民が訪れることができる時代になったことはやはり大きな進歩ではないだろうか。

盧山ではいま一万二〇〇〇人にも上る山上の住民を麓の九江市に引っ越しさせる計画が進められている。権力者や富豪のための別荘地としての長い歴史のなかで各種施設の管理に当たる職員数が肥大化した。下水道の整備もままならない山の上で、生活排水やゴミの処理は大きな問題であるし、約六〇〇棟ある往時の別荘の三分の一が管理職員たちの住居として使われているのはせつ々かの観光資源の浪費だとみな

されている。そこで住民を原則として下山させ、盧山での職場には麓から出勤させることにしようというのである。しかし、盧山の住民たちは住み慣れた家ばかりか、下山とともにリストラに遭って職も失うことを恐れている。盧山は過剰人員と従業員福利施設の肥大化という一九九〇年代の中国の国有企業と同様の問題を抱えているのだ。盧山はおそらくもう二度と中国の歴史の舞台となることはないだろうが、歴史を保存する場としてどのように生まれ変わるかをめぐる産みの苦しみの途上にある。

(まるかわ・ともお)

東京大学社会科学研究所教授